

JICA ボランティア 千葉

SV ニュース
第 10 号

平成二十年講演会・ 第六回定例会開催

昨年十二月十三日(土)に浦安市国際センターにおいて午後一時三十分より平成二十年講演会、午後三時より第六回定例会が開催されました。



講演会・第六回定例会開催の様子

当次長 笹館孝一氏より「新JICA発足・ボランティア事業の今後の展開」、千葉県総合企画部国際室長 浜本憲一氏より「千葉県の国際協力事業について」と題する講演が行われました。

一般県民の方々を含め約三十名の参加者は熱心に聴講し、活発な質疑応答が行われました。お二方の講演要旨は第二頁に掲載してあります。

講演会に引き続き第六回定例会が開催されました。冒頭の

品川会長の挨拶に引き続き活動概要報告に入り、上田事務局長より「平成二十年定期総会以降の活動概要」、山本副会長より「広報およびホームページについて」、増田幹事より「国際理解(開発)教育の今後について」の報告がありました。

引き続き黒田副会長の司会で総合質疑応答、意見交換に移り、次いで上田事務局長より二十年秋帰国者の紹介と当該シニアの自己紹介がこなわれました。



新帰国者の紹介

大谷 章助氏(スリランカ) 体育・空手
佐藤 泰助氏(アルゼンチン) 情報・広報
村上 智通氏(サモア) 機械工業・空港照明

なお三氏は当日、当会への入会手続きをされました。

次いで黒田副会長より二月二十八日開催予定の第六回帰国報告会への参加呼びかけとその他の諸連絡が行われ、山本副会長の閉会挨拶をもって午後四時終了いたしました。

平成二十一年度通常総会日程
日時 五月十六日(土)
午後一時〜四時
引続き懇親会を予定
会場 千葉市国際交流プラザ

引き続き新浦安駅アトレ内「やるき茶屋」にて、有志による懇親会が催されました。笹館青年海外協力隊次長も参加され、懇談が盛り上がりましました。

講演会・第六回定例会 品川会長挨拶要旨



当会は発足五十年、会員数九十一名となり、活動範囲が広まり

千葉県、JICA内での存在感が高まっています。

我々シニアボランティアは志高く海外に向いた時の初心を忘れず、帰国後もシニアボランティア体験の地域への社会還元、ならびにJICAのボランティア制度の広報活動への協力にさらに積極的に携わってきたいと考えています。

当会会報SVニュースも第十号に至りました。今後とも地域の方々に当会の活動内容、JICAボランティア情報を発信して行きたいと思っています。



昨年十月に着任以来、五ヶ月が過ぎました。千葉県JICAシニアボランティアの会の皆様には、日頃からJICAの事業にご理解とご支援を賜り、本当にありがとうございます。

二〇〇九年も、はや三月を迎えました。昨年秋の米国の金融危機に端を発した世界的な不況は、日本をも直撃し、企業の倒産や雇用の不安など閉塞感の漂う経済・社会情勢になっています。

こうした中で、去る一月二十日、政府の方針として、JICAボランティアの派遣を約二百人増やすとの報道がなされました。NHKのニュースなどでは、「雇用対策として」というテロップが流れ、違和感を感じられた方も多かったと思います。

ボランティア200人増のことなど

(独)国際協力機構 (JICA)
青年海外協力隊事務局長

伊藤隆文

我々としては雇用対策のためにボランティアを増やすつもりはありませんが、この閉塞感漂う日本の社会を元気にするために、JICAも一定の役割を果たすべしとの政府からの要請には、国の事業として応える必要があると考えています。

また、この時期に「ボランティア事業ががんばれ」と言われることは、むしろチャンスではないかと考えています。ODA予算はここ十年削減され続け、最盛期の六割になっていきます。ボランティア事業の予算も、またしかりです。更に、協力隊の募集も最近苦戦が続いており、二年続けて秋募集では二千人の応募者を確保することができませんでした。こうした状況を打開し、事業を再活性化させるチャンスと捉えたいと思います。

私は、JICAのボランティア事業は、開発途上国の発展に貢献するとともに、日本を元気にする事業であり、運動であると考えています。だからこそ、国の事業として続ける意味があるのだと思います。その意味で、帰国されたボランティアの皆さんの国内での活躍こそが、この事業の成否を左右すると言っても過言ではありません。

千葉県JICAシニアボランティアの会の皆さんの活発な活動に、目を見張るものがあります。最近の不況で母国に帰る人が増えているようですが、外国人労働者やその子弟の教育の問題など、帰国ボランティアの皆さんの活躍する場面は確実に増えていると思います。社会の中で外国人が一定の役割を果たし、異文化と共生することがもはや避けられなくなった日本の中で、貴会の益々のご発展を期待しています。これからも、JICAのボランティア事業をご支援ください。

定例会講演要旨

新JICA発足「ボランティア事業の今後の展開」

JICA青年海外協力隊事務局
国内業務担当次長

笹館 孝一氏



二〇〇八年十月にJICAとJICAのODA部門が統合し、資金規模としては世銀に次ぐ援助実施機関となりました。新JICAは技術協力、無償資金協力、有償資金協力という三つの援助スキームを一体的に実施すること、大規模な社会基盤整備への支援からコミュニティに根ざした草の根レベルの協力まで途上国の多様なニーズに合わせよりスピーディーかつインパクトのある協力を進めて行きます。

なお、十月一日の記念式典で、外務大臣御臨席のもと緒方JICA理事長の挨拶の中で三つの援助スキームと並びボランティア事業への期待についても言及しており、青年海外協力隊事務局としてもより質の高い事業推進に向け努力していく決意を新たにしています。

新JICAは「すべての人々が恩恵を受ける、ダイナミックな開発(Inclusive and Dynamic Development)」という新しいビジョンを掲げ、これを実現するため①気候変動や水

食糧 感染症の問題などグローバル化に伴う課題、②公正な成長と貧困削減、③途上国政府の政策・制度などガバナンスの改善、④人間の安全保障の実現と言った四つの使命に取り組みます。

ビジョン実践の実例として二〇〇八年十月にJICAとJICAのODA部門が統合し、資金規模としては世銀に次ぐ援助実施機関となりました。新JICAは技術協力、無償資金協力、有償資金協力という三つの援助スキームを一体的に実施すること、大規模な社会基盤整備への支援からコミュニティに根ざした草の根レベルの協力まで途上国の多様なニーズに合わせよりスピーディーかつインパクトのある協力を進めて行きます。

り、その現れの一つとして、教員採用試験でJOCV経験者に対して特別選考制度を設ける教育委員会が増えてきています。こうした事実についても、皆様方が普段取り組まれている海外ボランティア経験を社会に還元する活動の中で触れていただくことが事業の理解促進に有効と考えていますので、皆様のますますのご活躍を期待させていただきます。

千葉県の国際協力事業

千葉県総合企画部
国際室長 浜本 憲一氏

千葉県の国際協力事業の現状についてお話しします。

県では長年ブラジルの日系人の研修や、日本への留学等の協力などをしていましたが、国際協力のあり方について改めて考えるようになったのは四年程前になります。当時、海外技術研修員受入れに対する外務省予算が廃止され、実施中の案件を急に止められず県も明確な方向性を定める必要がありました。県庁の持つ信用を基に、NPO関係者やJICA

CAシニアボランティアに繋いだり、JICAやユニセフとの協力を深め、県内の団体などの育成を通じて国際協力の輪を広めてゆく事が県の役割だと考え始めたのです。

平成十八年に県内の大学の先生やNPOの方々やベトナムでニーズ調査を実施しました。その後、千葉大学の先生から障害児教育で対応が出来る、県では水質浄化や環境学習を対象に出来るのではないかと話が進んで来ました。そこでJICAのサポートも得てベトナムの障害児教育事業や、下水道事業をスタートさせました。

下水道事業では、ODAでハノイの処理場の維持管理研修、同市内の水質調査、研修員の印旛沼での水質改善の研修などを行っています。また、水環境保全の必要性理解のための環境学習普及方法や、下水道管理方法などを指導しているところでもあります。

障害児教育事業を始めるにあたっては、ベトナムと接点のなかった大学の先生に依頼することになり、準備が大変でしたが、ベトナムの先生との交流が深まるにつれ、学者同士の信頼関係で良い関係が構築されてきています。事業の成果として、相手方への貢献のみならず、今まで国内を舞台にしていた方々が国際貢献でも活躍できることが実証されたということが言えるでしょう。また、千葉工業高校と君津特別支援学校との障害児教育教材作成手法をハノイで実施するというアイデアが実を結んでいます。千葉工業高校が

ハノイ工科大学との姉妹校協定を締結するなどの成果もあります。これらの事業を通じ、千葉県のプレゼンスがアップしてきたと実感しています。このほか、ヨード欠乏症にカンボジアへのヨード支援があります。千葉県は世界的なヨード生産地で、ユニセフを通じカンボジアに提供しています。

広報活動の一環として毎年日比谷公園で行われている「グローバルフェスタ JAPAN」に二年連続で千葉県ブースを出しました。地方自治体で出展したのは千葉県だけということで誇りに思っております。県内で主催している「グローバルフェスタ Chiba」でも出展団体数、来場者数が共に伸びており、内容も充実したのとなつてきています。

二〇〇九年は日本・メキシコ交流四百周年で、交流祭も多々企画されています。これは四百年前、御宿の沖でメキシコ船が座礁、嵐の中で漁師や海女たちが二百十七名の船員を救助したという史実に始まりました。その後メキシコは日本との平等条約を初めて結んでくれた国となり、EPA条約を締結する国にもなったことを忘れてはいけないと思います。

国際協力とは、このようにできる事をするのが基本であり、金額の多寡はかりではないことを我々千葉の先人が教えてくれています。これから人々を誇りに思いつつ、今後も国際協力を推進していきたいと思えます。

国際理解(開発教育)活動

国際理解(開発教育)の薦め

増田定雄幹事



途上国を知って元気をもらおう

今、世界同時不況という百年に一度在るか無いかの厳しい経済環境の中で、富める国も貧しい国も、技術先進国も開発途上国も等しく深刻な奈落に落ち込んでいます。

こんなときに思い出されることは、経済的に満たされていない開発途上国では、これまでどのような生活をしていただのでしょうか。私たちJICAニアボランティアの会員は、それらの国の人々が貧しい環境の中で、しかし心豊かに毎日を送り、一方で追いつき、追い越そうと努力している姿を見て・聞いて・話して・多くの体験をしてきました。このようなときに、おかれた環境は厳しくとも、希望を捨てず明るく取り組んでいるそれらの国々の実情を学んで見ませんか？ このような国、開発途上国の社会の話を聞いて、明日に向けて第一歩を踏み出す元気をもらおう事もあるでしょう。

今、なぜ国際理解か

資源のない日本は、これらの国際化(グローバル化)で技術や経済や文化における海外との交流・交易と共に、より一層の内なる国際化、即ち知識・文化・習慣・宗教・国情などの理解を深めて、世界の国々と手を取り合って共に生きていくことが出来る地球という大きな村の公正な社会の構築に寄与する事ではないでしょうか？ キーワードは「多文化共生・異文化理解」です。



千葉市稲毛区轟公民館出前講座

その手始めに、いながらにして途上国の事を知る「国際理解出前講座」を聴いてみませんか。私達が提供しようとする出前講座は、日本の政府機関「国際協力機構(JICA)」が人選した技術・社会経験の豊かな中高年専門家がいます。派遣されたその国に二三年間滞在して相手国関係者と政府組織の仕事をしたことなしなら個人レベルで交流してき

たシニアボランティアの話は、新聞やインターネットではうかがい知れない、興味深い多くの事情が披露されます。まさに「知るを楽しむ」講座になるでしょう。

「多文化共生・異文化理解の第一歩は世界の国々の真実の姿を知ること」



四街道市旭小学校で講演



千葉市磯辺第2中学校で講演

これからの活動は県内自治体の諸機関、教育委員会、学校現場の諸先生方のご理解をいただきながら小中学・高校生に世界の国々の姿を知ってもらい地球規模でこれからの

日本と世界を考えられる生徒を育ててもらうこと、未来の日本を担う生徒達が「学ばしき」を実感して「なぜ学ぶのか」を理解することを期待しています。



千葉大学教育学部で講師を務める

一方、これから実社会に出た時、途上国出身者と接する機会がますます多くなる時代に備えて、高校、短大・大学・専門学校生を対象に、そして地域社会を支えるシニア世代の方々に、それぞれの国と日本の違いを理解し、少しでも親しみを持って交流できる国際的視野を持った人材の養成に寄与することを期待しています。公正な地球社会の構築に寄与する人材の養成、「多文化共生・異文化理解」の第一歩も海外経験の豊富なシニアボランティアの話から世界の国々の真実の姿を知ることから始まるでしょう。

千葉県JICAシニアボランティアとは

（独）国際協力機構(JICA)がシニア海外ボランティアプログラムに基づき人選し、海外途上国に派遣した千葉県出身者あるいは在住者が帰国後に親睦を図り、あわせてこれまでに培ってきた知識・経験・ノウハウ、特に多様な言語圏の異文化社会の中でコミュニケーションを図ってきた経験を千葉県の国際協力事業やJICAの地域協力事業に生かし、地域に根ざしたボランティア活動の展開を目的としています。

国際理解(開発教育)推進会議の開催

当千葉県JICAシニアボランティアの会では、掲題の国際理解(開発教育)活動を三年前から始めてきました。更に有意義でかつ効果的な活動を展開する目的で本活動に関心のある登録会員に諮り、三月四日午後、千葉市国際交流プラザにおいて掲題の推進会議を開催しました。

本活動の目的は、千葉県JICAシニア海外ボランティアの経験者による体験と派遣された開発途上国で学んだ事情を千葉県内の教育組織や諸活動・行事を通じて県民に還元すること、加えてこの活動を通じて海外開発援助(ODA)の理解を深め、その一環としてのJICAシニア海外ボランティアや青年海外協

力隊の応募希望者への内容説明などを実施することです。

これまでの三年間の実績はそれなりに理解と共感を得て、広く支持されてきましたが、まだまだ当初の意図には程遠く、本活動への登録会員の潜在力を十分生かすまでにはいならず、また各地域の県民に広く活動を理解して戴くにはまだ活動の趣旨が十分には周知されていない状態です。活動の展開は「国際理解出前講座」を軸としているが実施しようとしている講座の具体的な進め方、講話の手法、効果的なプレゼンテーションの内容など最新の技術や話術に習熟すること、組織や地域の諸活動のニーズに見合った内容の講話をすることも講座の関心を高めるために有効です。



以上の内容を含め、今後さらにどのような展開をすることが効果的であるか、多くの断面から検討し討議され、結論はひとえに登録会員による外部への積極的な情報発信と熱意に掛かっていると、具体的な活動内容をさらに検討することになりました。

SVニュース第十号までを振り返って (編集担当)

当会の会報として平成十六年三月に創刊して以来、読者の皆様に支えられて、本号で十回目の刊行となりました。

創刊時の経緯を初代会長及川淳一氏に伺いますと、「当会発足後、会員より会報を出してはどうか」との強い要望があり、役員会で検討した結果、予算の目処も立ち、創刊することが決定された。平成十六年最初に原稿募集の広報を行ったところ予想を超える原稿が集まった。当時の岡本栄一郎幹事が中心となつて文書整理や編集作業を進め、塩沢かおりさん(初代JICA国際協力推進員)のご助力を頂き、千部を印刷した。会員、JICA関係、千葉県と市町村の国際協力、交流部門



に配布した。」とあります。また、第一面冒頭の会報タイトルは前述の岡本元幹事が

デザインされたもので、千葉県の県章とJICAのシンボルカラー(青色)と千葉県の県花である菜の花の(黄色)を合わせてあります。その後、SVニュースの文字を楠木孝雄幹事(当時)の発案で第二号より入れるようになりました。

当会報は当初、年一回の刊行予定で出しましたが、会員各位・読者の皆様に情報の伝達が遅くならないようにと平成十七年度の第三号から正式に半期ごとの年二回発行となり、現在に至っております。体裁は創刊時のA4版八頁、第一面および第八面カラー印刷の形式を第五号まで踏襲しました。その後、会の活動の場が広がり、記事量の増加で増頁の必要に迫られ、また、写真を多く掲載したいことから、平成十九年三月の第六号では上質紙・全面カラー印刷、十二頁建てに踏み切りました。新たに通販での印刷所を開拓、上質紙、全面カラー印刷の高級化にも拘わらず、それまでの電子印刷より単価を低減することが出来ました。ただし、コスト低減のため、印刷所での文章校正、写真色校正は省略し、最終稿まで自前で編集、それを印刷所に送付し、そのまま印刷するという発注形式をとっています。現在の印刷部数は千五百部で、当初より五割増

会員 動 静

会員現状

平成二十一年二月十三日現在の会員数は九十五名です。

(敬称略)

新会員紹介

平成二十年四月以降の新会員を紹介します。

藤家 梓 (シリア)

農業一般 長生郡

大澤トシエ(シリア)

繊維工業 松戸市

柿沼 豊 (ケニア)

体育(柔道) 印旛郡

坂本真理 (タイ)

総合・地域開発計画 (GC) 浦安市

崎元雄厚 (タイ)

鉱物資源探査 千葉市

嶋口博彰 (サモア)

商業経営 船橋市

反畑幸治 (タイ)

ビデオ教材制作 流山市

大谷章助 (スリランカ)

体育(空手道) 富里市

佐藤泰助 (アルゼンチン)

E・ラーニング 四街道市

村上智通 (サモア)

機械工業・空港照明

成田市

堀 甲子男 (モロッコ)

体育(柔道) 千葉市

再派遣帰国者

浦山和良 (マラウイ)

品質管理 市原市

豊永俊之 (チュニジア)

教育 佐倉市

北垣勝之 (ヨルダン)

人的資源一般 白井市

高木利公 (タイ)

情報・広報 館山市

及川淳一 (ボリビア)

建設機械維持管理 船橋市

再派遣活躍中の方々

ご活躍を祈念いたします。

寺島得司 (フィジー)

寺田博義 (タイ)

浜崎 丘 (アルゼンチン)

加藤哲男 (シリア)

小松英世 (グアテマラ)

鈴木 晶 (カンボジア)

須郷隆雄 (エクアドル)

羽田 亨 (パナマ)

木内良郎 (メキシコ)

退会者

在会中のご協力有難うございました。

小森英俊氏

横森直清氏

国際理解(開発)教育 推進活動

CCB主催「国際理解促進講座」講師派遣

平成二十一年二月十日、ポートプラザ千葉にて開催された、ちば国際コンベンションビュロー(CCB)主催JICA地球広場共催の「国際理解促進講座」に当会 上田事務局長が講師を務めました。



上田事務局長は「JICA海外ボランティア活動の紹介」の題で、タイ、ラオスでの活動と現在の在住外国人へのボランティア活動の概況ならびに活動開始の動機「現役時代お世話になった国々へのご恩返し」などについての講演を行いました。参加者は四十二名でした。

出前講座

本年度も国際理解(開発)教育推進に成果があり、出前講座も各地で実施しました。どの講座も受講者、企画担当者からの評価が高く、再度の講演を期待するとの声も寄せられています。

〈小中学校出前講座〉

○千葉市こてはし台中学校
平成二十年十一月五日(水)

対象 一年生全組

講師 横田勝徳幹事

演題 ボランティアへの思いを語る

アシスト 上田事務局長



生徒達から多数の感想文が寄せられました。その一文を掲載します。

〈公民館社会人出前講座〉

○富津市中央公民館
「平成二十年度市民文化教養講座」

平成二十年十月四日(土)

対象 市民約二十名

講師 後藤敏行会員

演題 トンガ王国見聞録

アシスト 横田幹事



任国のトンガ王国遭遇・体験した歴史的出来事とトンガ王国の風土と歴史について興味深い講演が行われ、好評でした。

○市原市立五井公民館
「五井楽学塾・秋」

平成二十年十一月二十八日(金)

対象 一般成人 約六十名

講師 大格 登会員

演題 海外ボランティアに挑戦して

アシスト 増田幹事



質疑を含め二時間の講話が行われました。身近な例を引用し、親しみやす

くわかりやすい説明でした。概ね共感を得て理解されたと考えられます。

○八街市中央公民館
「生きがい短期大学」

平成二十年十二月十七日(水)

対象 第二学年 二十四名

講師 後藤 優 幹事

演題 世界に目をむけよう

「ラオスでの生活・観察・体験」

アシスト 横田幹事



任国のラオスでの現地体験にもとづき、スライドとビデオを駆使、分かりやすく絶妙な講演でした。

○酒々井町中央公民館
「しすいタウンカレッジ国際社会」

平成二十一年一月二日(木)

対象 一般成人 約二十名

講師 堀端俊雄会員

演題 国際協力と

ボランティア活動

アシスト 黒田副会長

講演の終了後、酒々井公民館関係者より「講師の印象、話し方、内容、発表方法の全てが非常によく、分かりやすく

受講できました。聴取者の反応も良好で、講演をきっかけにシニア海外ボランティアに申し込むと決意した受講者や、海外でのボランティアは難しいので、まずは身近なところからボランティアを継続していきたいというような声が多くあり、受講者にとって大きな励みになったと思います。また出前講座を依頼したいです」との感想が寄せられました。



受講できました。聴取者の反応も良好で、講演をきっかけにシニア海外ボランティアに申し込むと決意した受講者や、海外でのボランティアは難しいので、まずは身近なところからボランティアを継続していきたいという

「千葉市国際交流プラザ」移転のお知らせ

これまで当会の年次総会や定例会、帰国報告会等々で利用してきました、センシティブター内の千葉市国際交流プラザが昨年十二月一日に左記住所に移転しました。五月十六日(土)の平成二十一年度年次総会と今夏の第七回帰国報告会は、同会場での開催を予定しております。

千葉市中央区中央二一五
千葉中央ツインビル二号館
八階(三井ガーデンホテル
及びパルコの筋向かい)
電話 043-202-3000
Fax 043-202-3111

会員随想

タイ人留学生のために

楠木 孝雄

(タイ 二〇〇一年四月〜
二〇〇二年四月)

タイ政府の内閣人事庁(OCSC)で、若い官僚を相手に真剣に政策論議を

交わした私のシニアボランテニア体験については、当会のウェブサイトの「アジア地域寄稿IIタイII真剣勝負の一年間でした」に掲載中です。

「OCSCへのボランテニア活動は、この報告書で終わるものではない。帰国後も引き続きOCSCの手伝いができることを念願している」と職場へ残した報告書の最後の文言は、有意義な一年間を与えてくれた仲間たちへの感謝の気持ちの表明でした。

有言実行、帰国後七年たった現在も、OCSCへのボランテニア活動は続いています。特に、閉鎖されていたOCSCの東京事務所が、〇七年にタイ王国大使館学生部として復活して、その責任者に旧知のワリンさんが着任してから、OCSCは再び身近な存在となり、私の日々の生活の中で大きなウエイトを占

めることになりました。

タイ政府派遣留学生の所管はOCSCで、ワリン公使参事官は、私費を含めて二千数百人の在日タイ人留学生を総括する立場です。この中で、特にワリンさんが注意して面倒をみているのがODOS(One District One Student)留学生。大学進学もままならない家庭の子女で成績優秀なものを、全国各郡(県の一つ下の行政組織)から一名宛選抜してタイ政府の負担で、非英語圏に留学させる制度で、現在、一期生百二十人(大学三年生)、二期生百五十人(同一年生)合計二百七十人のODOS留学生が日本で学んでいます。



在日タイ人留学生集会
(JICA 地球ひろば)

思いがけず日本留学の機会を与えられたODOS留学生、日本語や日本の生活について予備知識が少ない分、一般の留学生に比べて、日本の大学生活の精神的負荷が大きいと予想されます。一方で、

帰国後は国家公務員として国家への奉仕が義務付けられている通常の政府派遣留学生と異なり、ODOS留学生は大学卒業後、帰国して自由に就職先を選べることになっています。日本の大学で学んだことと日本語の知識をベースに、彼ら、彼女たちが、タイ社会のいろいろな分野で活躍することが、日本・タイ両国の親善関係を大きく発展させる力になると確信しています。

今年に予定されていた第三期生の受入準備を最優先のテーマとして取組んできましたが、残念ながら、タイの政変、財政事情の悪化によって、その実現が危ぶまれる事態になりました。現在いる学生たちの生活、学習のサポートと、タイにいてこれから日本留学を目指す若い人たちに向けた「留学生のための日本語用語集」編纂などが今年の重要テーマになりそうです。留学生三十万人受入を標榜する時代、留学生の日本語学習に特化した電子辞書の発売につなげることでできれば面白いと考えています。

ボランテニアとしてご協力いただける方、左記宛ご連絡いただければ幸いです。

ksnokri@dance.plala.or.jp

南米の内陸国ボリビア

チエ・ゲバラ終焉の地

及川 淳一

(ボリビア 二〇〇七年三月〜
二〇〇八年三月)

国土面積が日本の三倍の約百万平方キロメートル、人口は八百八十六万人(二〇〇五年)日本の都道府県別人口第二位の大分府に匹敵、南米大陸の西側を背骨のようにアンデス山脈が縦断し、その山脈が東西に峰別れたあたりに海のない内陸国ボリビアがあります。

アンデス山脈が東西に分かれてできた高原(標高四千メートル)の一部が侵食された狭い谷の中に、同国政府の主要機関が集中する事実上の首都ラパス(標高三千六百メートル)があります。



高層ビルで埋まるラパス中心地

なお、憲法上の首都は世界文化遺産に登録されているスクレです。インカ文明の発祥の地とされるテワナ

ク遺跡、標高三千八百メートルのチチカカ湖、ウユニ塩湖などもこの山脈の中にあります。



ティワナク遺跡(世界文化遺産)

しかし、この国は豊かな天然資源を持ちながら南米の最貧国とされ、百万人以上の人びとが周辺国やスペインへ出稼ぎに出ているといわれています。

二〇〇六年に南米で最初のインディオ出身のエボ・モラレス大統領が誕生しました。彼は虐げられてきた先住民の権利拡大などを指向した社会主義的な改革を行おうとしています。既得権を守ろうとする欧米系の移住者と激しく対立して、社会不安を引き起こしています。

この国は、多数の先住民が住むアンデス山脈周辺地域と、欧米系の住民が多いアマゾン河流域地域との気候・風土・文化・宗教・習慣などの違いがはっきり

分かれていて、深刻な対立を生んでいます。

たとえば、この国に九つある県のひとつで私の任地だったサンタクルス県は、アマゾン河支流域の平坦地（標高四八〇メートル）にあって、今ではこの国の商業の中心地となった比較的裕福な県ですが、日本の面積とほぼ同じ三十七万平方メートルに人口はわずか百五十万人あまりで、サンタクルス県道路管理局が管理する県道（ほとんど土道）は四千里メートル以上（ちなみに北海道の稚内から沖縄の与那国島まで二千三千里メートル）の長大な維持管理費を必要としており、そのほか、県民の様々な要求を満たすだけの行政を行うのは、財政的にもほとんど無理といえます。

日本の大部分の国民にはなじみがないこの国にも、県都サンタクルス市の北方には、移住五十周年を迎えた日系人の移住地が「オキナワ第一・第二・第三、サン・フアン」と四つもあり、そこでは大豆・小麦・コメ・野菜・サトウキビなどの生産や畜産、酪農が盛んで、ボリビア農業の拠点となっています。

そして、このボリビアは革命家チェ・ゲバラの終焉の地でもあります。南米革命を夢見て作戦中のゲバラが一九六七年十月九日にボ

リビア国軍に捕えられ処刑された寒村ラ・イゲラは、アンデス山麓にあります。



仲間と眠るゲバラ
(左端の星印の墓)

現地活動便り

オーラ！エクアドル

須郷隆雄（エクアドル）



我が町リオバンバは、エクアドルの最高峰、六千三百六十メートルのチンボラソ山を始め、五千メートル級の山々に囲まれた人口十三万人の小さな町だ。標高二千七百五十メートル、チンボラソ山の県都だ。エクアドルのほぼ中央にあり、交通の要衝ともなっている。首都キトからバスで三時間。「アンデスの廊下」と言われる南米縦貫道が走っている。登山家やトレkkerには魅力的な町であり、小さいながらも古い

歴史を持つ。

エクアドルはインディオが多い。インディオが二十五割を占める。インディオと白人の混血、メステイソが五割、合わせてインディオ系が八十割を占める。ヨーロッパ系白人は十割、アジア系を含めアフリカ系が十割だ。人口は千三百万人、国土は日本の四分の三、宗教はローマ・カトリックだが、インディオにはエヴァンゲリオというプロテスタント系も多いと聞く。日本でも馴染みのバナナやコーヒー、切花、エビが代表的輸出品だが、原油や天然ガスはエクアドル収入の五十割以上を占めている。

エクアドルは国名が示すとおり赤道直下に位置し、アンデス山脈が南北に縦断し、西に太平洋、東にアマゾンが広がる。こうした地勢から国土はアンデス高地部（シエラ）、アマゾン低地部（オリエンテ）、海岸部（コスタ）およびガラパゴス諸島の四つに分けることができる。シエラは「火山通り」とも呼ばれ、四六千メートル級の山々が連なり赤道直下にありながら、常春である。オリエンテはアマゾンの北西部入り口に当たる高温多湿の熱帯ジャングルだ。手つかずの自然が多く残されている。コスタは太平洋に面した海岸部だ。赤道直下の熱帯に属しながら、フンボルト

海流の影響で比較的穏やかな気候と降雨に恵まれ、バナナやコーヒー、カカオなどエクアドルの輸出品の多くを産出している。ガラパゴスは言うまでもなく、ダーウインがビーグル号で航海中にめぐり合った世界自然遺産第一号の島である。

紀元前三千年ごろから花開いたバルデビア文明、更にインカ文明へと引き継がれた長い歴史と文化を持つエクアドルは、多様な気候と風土を有し、多くの謎を秘めた魅惑的な国のように思える。

どのような二年間が待っているのかは解らない。配属先は県庁ということになっているが、勤務先はチンボラソ乳製品組合だ。



エクアドルの愉快的仲間たち

チンボラソ県内の八会員を傘下に、農民参加の三十七の小さな乳業工場を統括している。職務はマーケティングということになっているが、要は何でも屋だ。ここの愉快的な

仲間たちとリオバンバを拠点にこの魅惑的な国の多くを知ってみたいと思っている。

ダマスカスでの服飾教育

大澤トシエ（シリア）



四十歳を過ぎた頃から、将来は自分の経験を海外でボランティア活動

をしたいと考えてようになりました。ほぼ二十年後の二〇〇六年三月、JICAのシリア海外ボランティアとして未知の国、中東シリアのダマスカス繊維工業専門学校（DIITI）で二年間活動する機会を頂きました。

DIITIは一九六九年工業省管轄の職業訓練校の一環として設立され、現在は紡績科、織布科、化学染色科、既製服科の四科を擁する高卒者対象の二年制の繊維専門学校です。

創立以来業界の中核となる技術者養成に取り組み、卒業生を主要な国営繊維産業に送り込んできましたが、近年その教育内容の立ち遅れは繊維産業に対する社会の期待やニーズに応えるにはほど遠い状況となっていました。二〇〇三年日本政府からの設備と

機材の無償供与を機に二〇〇四年JICAからシニアボランティアの派遣が開始され変革への努力が始まりました。

私の配属部門である既製服科はDITの四科の中でも特に遅れている部門で、服飾教育の場というよりミシン工の養成所ともいふべき所でした。そこで服飾専門家の養成を目指してカリキュラム改正への準備のための活動を始めました。具体的には各種物差やハサミなど細々とした道具類、姿見、ハンガー掛け、棚の設置など徐々に授業環境を整えながら必要な教科書を作成し、日本製立体裁断用人台を使って「立体裁断」の授業を開始しました。



立体裁断の授業

立体裁断は工業用のパターンを作るための技術でアパレル企業には非常に重要ですが、当時のシリアでは未経験の技術であり未知の教科でした。夏期と春期の研修では市

場調査、製品企画、デザイン表現（イラスト）、パターン制作、サンプル縫製を経て作品製作を行いました。世界のアパレル産業の現場で行われている工程を同じように辿って物づくりをすることは学生たちへの教育というだけでなく、職場の教育者達にカリキュラム改正の必要性を理解してもらったための活動でもありました。次に立体裁断のインストラクターを養成し、最後に努力の成果を発表するためのファッションショーを開催出来たことは学生たちに大きな自信と誇りを与えることができたと思います。

男性優位のイスラム社会で困難にぶつかりながらの活動でしたが、立体裁断を理解し学び取ろうと真剣に取り組んでくれた学生たち、ファッションショーに漕ぎ着けようとして一致団結してくれた職場の同僚達から例えようのない喜びと感激をいただきました。二年間支えてくださったJICAスタッフ、シニアボランティア、そしてシリアの皆さまに深く感謝しております。

ブエノ デディア

(パナマ流こんにちは)

羽田 亨 (パナマ)

千葉県JICAシニアボランティア会員の皆様こんにち



は。二度目のJICAシニアボランティアとしてパナマ共和国の首都パナマシ

ティに来ています。パナマはパナマ運河とパナマハットで有名で、南、北米の通路に位置する人口三百三十万人のラテンの国です。こちらに来て四カ月になりますが、途上国とはかけ離れた先進国並みの活気を感じています。今は建設投資のラッシュで五十階以上の建物や高級ホテルがあちこちに見られます。又、ここでは年金生活者への税やサービスの優遇制度があり、この地で余生を送る欧米の人たちも数多くいるとの事です。私も今その恩恵に浴しています。

その一方で、首都以外の地方との格差は大きく、中南米二番目の貧困率から「二つのパナマ」が混在していると言われています。パナマは十六世紀にスペインの統治下に入り、一八二一年のコロンビアへの併合、分離を経て今年建国百六年です。人種は白人系からインディオの濃い人まで様々ですが、七十割は白人とインディオの混血でメステイソと言われます。ラテン特有のとても陽気で音楽と踊りを愛する人たちです。しか

し近年は経済成長の歪から大都市での銃犯罪は漸増していますし、南米からの麻薬のルートとしても危険視されています。私は市内中心部のアパートメントで暮らしています。幸い安全対策がしっかりとされており、市内は生活物資も豊富ですから、危険や不自由を感じることはありません。しかし何処の国でも同じかも知れませんが、夜間の街中は要注意というわけです。

さて、今回の要請はプラスチック製品の「輸出促進」で、当国の通産省、産業局に席を置き、産業の実態調査、現状分析、輸出促進に向けたロードマップ作りの順に活動を始めました。産業局は製造産業の育成が業務で、昨年からプラスチック製造に焦点を当て、輸出競争力の向上に取り組み始めました。そして今回はその海外協力第一弾で、期待の大きさを感じています。



ロス パナメーニョス

これまでに統計調査、分析

を行い、一月から本格的な現場調査に入りました。「パナマ時間」に合わせてペースはゆっくりですが、おぼろげに産業の形が見えてきたというところでしょうか。

ところで、パナマ経済の特徴はGDP約二百億ドルのうち運河関連を含めたサービス産業の比率が七十七割を占めている事です。製造産業の比率は十四割に過ぎず、その半分以上は食品、飲料の製造です。プラスチック製造は小規模に留まっていると見られ、需要の半分は近隣国からの輸入に依存しています。

パナマは現在、米国、中米共同体、カリブ共同体とのFTA交渉を進めており、近い将来には国際競争力という高いハードルを越えなければなりません。そのための課題は盛りだくさんですが、当分野での初のSVとして「小さな提案」をいくつか着実に伝達できれば幸いと考えています。そして、産業局の同僚と後任シニアボランティアへの良いバトンタッチができる事を目指します。

明るい太陽の下でテンポの良いラテン音楽を聞きながら、片言のスペイン語で「ロス パナメーニョス」とのゆったりとした生活もエンジョイしていきたいと思っています。

スリランカでの 空手道指導体験記

大谷章助（スリランカ）



シニアボ
ランティア
に参加する
きっかけは
二〇〇四年
四月（社）

会での指導員合宿中にJICAの職員が募集説明に來られて、シニアもボランティアに参加出来る事を知ったからでした。その時はまだ参加できる環境に無かったのですが、二年後の二〇〇六年四月に応募しました。指導科目は体育Ⅱ空手道の指導です。無事合格したのですが、私達は駒ヶ根研修センターで約三五日の合宿がありました。シニアでは初めての事だったのは合宿中に知りました。現在は青年とシニアと一緒に合宿をされているようです。きっと我々の研修態度が良かったからだと思負っています。

ホテルへ三時頃着き、朝九時から担当の西調整員他から現地での導入教育を受け、その間に住む場所を決めました。十月十七日から所属団体であるスリランカ空手道連盟のナショナルチームの指導を始めました。場所はコロンボ市にあるスポーツ省の体育館です。通称DSD体育館と呼ばれ、スリランカ国独立記念公園の前にあります。十二月にアジア大会がドーハ（カタール）で行われる為、選手は全員代表予定者でした。この中からどのクラスの誰を代表で出すか色々あったようです。着任間もない私は選考には関与しませんでした。総監督としてドーハに参加要請がありました。私は着任後三ヶ月未満の為すんなりとは許可されず、スリランカオリンピック委員会会長からJICAに手紙を出してもらい、十二月六日特別に許可されました。ところがその日に私が発熱し、八日に病院で診察した結果 Dengue 熱に罹っているとの事で出国禁止に成り、選手とコーチだけが十日に出発、私は療養する事に。その後の血液検査でチクングンヤと Dengue の両方のウイルスに侵されていたことがわかりました。熱が引いた後の言い表しようの無い感覚、このまま死んでいくのではないかと・・・親

切な大家さんが毎朝食事を作って届けてくれたおかげで回復しました。



青年海外協力隊員と Sri Pada 登頂

アジア大会後、解散していたナショナルチームを再編し、二月から元気に指導を再開できました。選手のモチベーションを高めるべく、カンボジアとバングラディシュのシニアボランティアと広域研修を企画し、十一月二十五日から十二月五日までカンボジアで研修を開催。各国の選手他四十五名が参加し、カンボジア内戦で孤児となった子供達と空手の指導交流もしていました。十月に研修参加選手選考を兼ねた国内大会が開かれた為、健康診断一時帰国を十月二十八日に設定、そのスケジュールに合わせてスリランカから二組の指導者の来日を迎えました。合計十四日間は彼等の為に行動し、とにかく駆け足のボランティア体験でした。



日本での研修

二〇〇八年一月に内戦が激しくなり行動が制限された為、国の指導は休止状態に。それでも学校や道場で少年を指導でき、お世話になった方々に感謝、感謝です。

異文化との触れ合いを楽しむ、サモアに於いて

村上智通（サモア）



サモアは南太平洋の真只中に位置しフィジー、トンガに近い。ウポル島、

サバイ島、その他の小さな島々からなり、併せて島根県ほどの面積に約十八万人が住む。海洋性気候の為、気温は、乾季の二十四度から雨季の三十一度の間で変動し、慣れると実に過ごし易い気候であった。人々の性格は、おおらか

で、男女とも少し肥満気味であるが、巨体の持ち主が多く、小錦クラスの人々が通りを闊歩していた。衣食住の心配の余りない環境にあるから、あくせく働く姿は見られない。国民の九割以上がキリスト教の敬虔な信者であるせいか国全体が一つの大家族の様で、相互扶助の精神に富んでいる。小額の借金なら返さなくとも余り非難される事はない。年長者が敬われ、バス中では、若者が当たり前の如く年長者に席を譲る。更に満員になると、車内で乗客が立つことは、規則違反になる為、他人の膝の上に他の乗客が座るのである。目上の人、上司、教師などの言う事は絶対で、逆らう事は反社会的な行為と見られている。母親でもない女性が、彼女よりも背の高い少年を悪戯をしたとかで、引つ叩くのを見た事がある。女性の地位は想像したよりも高く、政府の要職にもついているし、銀行や店舗の課長、主任は殆ど女性であった。村々の自治はマタイ（酋長）達の村会議で決定され、政府の行政も村の自治権にまわらぶ事はない。軍隊を持たないのだからクーデター騒ぎは全くなき、犯罪も少なく警察官は、武器を携行していない。南太平洋の島国の中で治安

は、一番よいとされている。南太平洋の真珠とも呼ばれているこの美しい島国にも、文明による環境破壊が進んでいる。プラスチック塵が道端や海岸に多く見られるし、黒い排気ガスを撒き散らす整備不良車が目立つ。街中の側溝は、生活廃水の垂れ流しでドブ川化し、それが湾に流れ込んでいる。人口密度が低いせいで環境破壊の速度が遅く、多くの国民が未だその事について無関心であった。



サモアのカウンターパート達

職場の仲間や街で知り合った人から、日本についてよく質問をされた。その中で面白かったものを紹介してみよう。「日本に飛行場は幾つあるのか?」「日本の飛行場にジャンボは飛んで来るのか?」(サモアではクリスマス前の前にニュージージラランドに移住した家族親戚が大挙して帰省し、その際に数機のジャンボ機が就航する)「日本に車は何台位あるのか?」「日本にジェット

戦闘機はあるのか? (オーストラリアよりも多いと答えた)ら、大きな目を更に大きくして驚いていた)「日本にテレビジョン放送局は幾つあるのか?」。これらの無邪気な質問から一般的に日本は、余り良く知られていない様に思えた。

アルゼンチンでの ボランティア活動

佐藤泰助 (アルゼンチン)



二〇〇六年十月から二〇〇八年九月までアルゼンチン国立技術教育機構(以下INET)にて、女性助教二人と助手一人、学生三人をカウンターパート(以下CP)としてeラーニングの改善を助言しました。

要請内容

配属先のINETはJICAの技術協力プロジェクトを二回受け入れてきました。(①一九九一年〜一九九六年 情報処理研修センター、②二〇〇一年eラーニング・Webデザイン。)今回の要請事項「eラーニングの改善」はその延長線上にあり、インターネットで配信する教材の中で音声と動画を使用できるようにするものでし

た。活動内容と成果 活動計画はCPとの間で最初の三ヶ月の間に作成できました。活動は二年間を前半と後半に分け、前半で教材を発信するサーバー側のソフトウェアを改良し、後半で新しい学習教材(コンテンツ)を開発することにしました。サーバー側のソフトウェアは、現在使用しているソフトウェアだけでは音声と動画を扱う際に表示時間が遅くなる問題があったため、その解決策としてストリーミングサーバーと呼ばれるソフトウェアを追加で導入することを提案し、CPの合意を得ました。



一緒に活動した学生

最終的にはCPの経験と発生費用を考慮して、米国マイクロソフト社のソフトウェアを採用しました。音声と動画を使用するコンテンツは、通常の説明部分に音声をつけて物の動きや操作の手順を動画で表現することにしました。

また、説明用の図表はパワーポイントのスライドをそのまま使用しました。

課題と対策 活動の中で発生した主な問題は、①メンバーとのコミュニケーション、②CP上司の過度な期待の二点でしたが、なんとか解決できました。

一点目は私がスペイン語の初心者であり、CPの助手と学生の内合計二人が英会話が苦手だったため、できる限り説明内容を英語の文書で事前に渡して目を通しておいてもらい、その後に英語で説明することに対応しました。二点目はCPの上司がJICAに対してプロジェクトの場合と同じ感覚で必要なソフトウェアの供与を期待されましたが、必要最少限の費用で要望内容を実現するためベンダーから見積書を取り、事情を説明してこちらの提案を了解してもらいました。

ボランティア活動の楽しさ

アルゼンチンは初めてでしたが、CPとの私的交流や同期ボランティア十二人および同伴家族との親交でたいへん楽しく過ごしました。

連休には同期の人たちと一緒にいろいろな観光地に出かけ、家族を一時呼寄せた時にはその中から厳選した場所を案内できました。

JICAシニア海外ボランティア募集説明会参加

JICAの平成二十年度秋募集シニア海外ボランティア体験談&説明会が十月十一日(土)に千葉会場、十月二十五日(土)に船橋会場で開催され、当会会員が協力参加しました。

千葉会場 (京葉銀行プラザ)

パネリスト

北垣勝之、高木利公両会員

よろず相談員

加藤眞理会員

オブザーバー

津田幹事



船橋会場 (中央公民館)

パネリスト

大沢トシエ、柿沼豊両会員

よろず相談員

水野純也会員

オブザーバー

及川淳一会員、品川会長、

黒田副会長



第六回帰国報告会開催

「千葉県シニアボランティア第六回帰国報告会」が平成二十一年二月二十八日午後、浦安市国際センターで開催され、平成二十年秋帰国者五名の帰国報告がありました。一般市民を含め参加者は約三十五名で、報告者からはそれぞれ海外ボランティア体験、異文化接触、任国事情などについてスライドを用いた熱心な、新鮮な報告がなされました。



帰国報告会会場全景

報告者およびタイトルは次のとおりです。(敬称略)

大谷章助(スリランカ)

シニアボランティア空手道指導スリランカ体験記

佐藤泰助(アルゼンチン)

アルゼンチンにおけるeラーニングの改善

羽関総一郎(チェニア)

ボランティア活動を通して感じたこと

村上智通氏(サモア)

私のサモア生活と

ボランティア活動

渡辺 章(パプアニューギニア)

パプアニューギニアの

マリア対策

終了後、参加者有志による懇親会が新浦安駅ビル内和風レストランにて開催されました。

各地国際フェスティバル参加

各地で開催された国際交流・国際協力フェスティバルに出展参加しました。JICA事業紹介や当会員活動の写真の展示、国際理解クイズ、シニアボランティア応募相談などを行い地域の方々の交流を通じて、国際理解の促進、JICAボランティア事業の啓蒙に努めています。

○四街道市市民文化祭「学びの広場」

平成二十年十一月一日
四街道市文化センター



四街道在住の影山会員が市民文化祭「学びの広場」実行委員として活躍されました

(参加者) 影山会員、山本

副会長、上田事務局長、

酒井幹事夫妻

○生涯学習フェスティバル

市県民プラザ(柏市)

平成二十年十一月十六日
さわやかちば県民プラザ



地元会員の方々が多数参加して下さいました

(参加者) 及川、大澤、柿沼、北垣、堀端、宮崎(征)、山野辺各会員
黒田副会長、木野本国際協力推進員

○第十二回浦安市国際交流・協力フェスティバル

平成二十年十一月十六日
ショッピングプラザ新浦安



女性陣が大活躍でした。(左より酒井徳子・市井博子両会員、木野本国際協力推進員)

(参加者) 市井、河合、

宮崎泰各会員、品川会長

酒井幹事夫妻、木野本国際協力推進員

○生涯学習ボランティア

パーク2009年
平成二十一年二月十六日

千葉市生涯学習センター



当会、JICAの紹介パンフレットの説明

(参加者) 品川会長、上田事務局長、増田、後藤、横田、酒井、津田各幹事

当会が参加した展示の部は月曜日から金曜日までの平日のみの開催でしたが、期間中比較的多くの来訪者がありました。

海外ボランティア相談コーナーには、長時間にわたり質問をするなど関心を示す人がありました。

当イベントは千葉テレビのニュースにも紹介され、当会もその一コマを飾りました。

○ちば市国際ふれあい

フェスティバル2009
平成二十一年三月一日

きぼーる 千葉市複合施設



33団体がブース出展、1階のステージでは13団体による出し物が上演されました

(参加者) 品川会長、上田事務局長、酒井幹事夫妻、後藤、横田 両幹事
木野本国際協力推進員

生憎雨の降る寒い中でありましたが、多くの来場者がありました。当会のブースでは昨年同様、JICAボランティアに関する相談コーナーを設け、国際クイズを実施しました。相談コーナーではJICAやシニアボランティアに興味を持つ相談者にパンフレット等による対応を行いました。国際クイズでは酒井幹事夫妻が大活躍で、景品が午前中で無くなる有様でした。当会ブースがあった一階会場は、出入り口に近く寒さがこたえました。

JICA・JOCAよりのお知らせ

シニア海外ボランティア体験談&説明会

平成二十一年春募集についての日程が決まりました。

千葉県関係は次の三カ所でシニア海外ボランティア、日系社会シニアボランティアのOB・OGの体験談発表や活動紹介ビデオの上映や制度、応募についての説明があります。なお、会場ではOB・OGやJICA職員との個別面談、資料閲覧も可能です。

青年海外協力隊、日系社会青年ボランティアの説明も同日同所にて行われます。

JICAボランティアに応募を考えている方や、興味のある方がOB・OGの体験談を聞ける良い機会です。是非各会場において下さい。

千葉会場

四月四日(土)

十時三十分～十二時三十分

京葉銀行文化プラザ 六階

(JR千葉駅東口徒歩三分)

柏会場

四月十四日(火)

十五時三十分～十七時三十分

アミューゼ柏

(JR柏駅東口徒歩七分)

船橋会場

四月十八日(土)

十時三十分～十二時三十分

船橋市中央公民館 六階

なお青年海外協力隊の募集説明会は次の通りです。

千葉会場 四月四日(土)

十四～十六時

柏会場 四月十四日(火)

十九～二十一時

船橋会場 四月十八日(土)

十四～十六時

第三回協力隊まつり

JICAボランティアによる第三回協力隊まつりが平成二十一年四月二十五日(土)

(二十六日(日))に渋谷区広

尾のJICA地球ひろばにお

いて開催されます。青年海外

協力隊とシニアボランティア

のOB・OGが結集し、「ボラ

ンティアが接した世界の笑顔

というテーマの下に多彩なイ

ベントが挙行されます。

当会もブース出展いたします

ので、皆様のご参加をお待

ちしています。

なお、二日間にわたってJ

ICAボランティア募集説明

会もあわせて行われます。

派遣前シニアボランティアが

千葉県庁を訪問

平成二十年秋・冬に派遣さ

れるシニアボランティアが千

葉県庁総合企画部を表敬訪問

されました。

九月十八日(木) 第二次隊

七名と十二月十九日(金) 第

三次隊四名のシニアボラン

ティアで、それぞれ依田 茂

総合企画部長より激励のご挨拶を受けました。



第二次隊シニアボランティア七名



第三次隊シニアボランティア四名

千葉県ボランティア

家族連絡会

当会からは九月十八日に黒田副会長と酒井幹事、酒井夫人、十二月十九日は後藤幹事と酒井幹事が立会いました。

十一月一日午後、千葉市京葉銀行プラザにおいて主催JICA地球ひろば、共催青年海外協力隊千葉OB会および当会、後援社団法人青年海外協力隊を育てる会で、千葉県

ボランティア家族連絡会が開催されました。青年海外協力隊関係留守家族が三十二家族、シニア海外ボランティア二家族が参加、当会品川会長、中島敏雄会員と北垣勝之会員が出席しました。現地活動報告で北垣会員がヨルダンでの学校経営について説明、留守家族から現地事情がよくわかり安心したとのコメントがありました。

JOCA新春交歓会に参加

一月二十四日(土)に青年海外協力協会JOCA主催の新春交歓会がJICA地球ひろばで開催され、当会から及川・武藤両会員、品川会長、黒田副会長が参加しました。

午後、金沢大学宇野文夫氏による「能登里山マイスター養成プログラムが目指すもの」自然と共生する地域再生の試み」の講演があり、引き続き歓談会が開催されました。

各国大使館、国会議員、外務省、国際協力機構などからの多数の来賓とJOCAのOB・OGおよびシニアボランティアのOB・OG約四百名が参加しました。

CCB便り

今年度最後の帰国報告会では多くの方々から帰国ボランティアの報告に熱心に耳を傾けていま



した。来年度のボランティア募集ではより多くの人材の確保が急務となっており、それを後押ししていただくような報告会となりました。(JICA千葉県国際協力推進員 木野本まゆみ)

編集後記

SVニュースも十号を数えました。

ある市の教育委員会の方から電話があり、現地活動体験を読んで、公民館の講座で是非講話をお願いしたい、との要請があり、出前講座が実現しました。また、もつと配布部数を増やしてもらいたい、とさる図書館の担当の方から連絡を受けたこともあります。

このように情報の相互交流ができたことは、編集担当として、この上もなく喜ばしいことです。読者の皆様と、より発展的な交流が出来ることを念願しております。

(黒田昭太郎)

本紙へのご意見、ちば出前講座のお問い合わせは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会
(The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba)
043-255-3810 (山本)
shigeho_yamamoto@yahoo.co.jp

千葉県国際協力推進員
043-297-0245 (木野本)
jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp